

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

外国人技能実習制度における日本語教育の役割
—中国人技能実習生のライフストーリーから—

上田 潤子

2015年9月

第1章 序章

私は、2011年から2013年まで赴任した中国の中等職業学校、Z学校において、初めて「外国人技能実習制度」という日本政府公認の制度に触れ、技能実習生として渡日する生徒たちの日本語教育を担当した。日本語教育学の観点から為された技能実習生に関する研究は非常に少なく、本制度を日本と送出し国の相互にとって有意義なものとするために日本語教育の充実が非常に重要であるにもかかわらず、本制度と本制度の下で来日する技能実習生の実態が日本語教育関係者に周知されていない。本研究は、ネガティブな面ばかりが強調されることの多い「外国人技能実習制度」を背景にしながらもさまざまなことを学んで人生の糧にしていく人の強かさ、そしてそこで日本語教育が果たす役割を示すことを目的とする。

Z学校の生徒たちにとって日本語を学び技能実習生として日本へ来たことはどのような意味を持つのだろうか。この問いの下に、次の2つのリサーチクエスチョン(以下RQ)を設定した。

RQ1. Z学校の生徒たちは技能実習を通して何を学んだのか。

RQ2. Z学校の生徒たちは技能実習を通して学んだことを現在どのように生かしているのか。

第2章 先行研究

本研究の日本語教育学における位置付けを示すため、「技能実習生を対象とした研究」と「ライフストーリー研究」という2つの角度で先行研究を概観した。

浅野(2001)、馮(2013)は、ともに量的調査をもとに、地域の生活者としての技能実習生の日本語教育を考えることの重要性を訴えている。個人に焦点を当てた研究としては、小松(2009)、落合(2010)があり、積極的に日本語学習に臨み、滞日経験を前向きに生かそうとする技能実習生たちの姿が描き出されている。

いずれの研究においても、技能実習生来日後の日本語教育に主眼が置かれている。本研究では、技能実習が円滑に進むために技能実習生の来日前の日本語教育が重要であることを主張したい。

川上(2014)は、近年、日本語教育学においてライフストーリーという手法が注目を浴びるようになった背景として、1990年代までは「いかに『日本語を教えるか』」、その後、『教室』から『教室外』へ、あるいは『教える側』から『学ぶ側』へと視野が拡大され、近年では「時間的にも空間的にもより広い生活や人生の中で学習者が日本語学習をどのよう

に意味づけ、どのように日本語を使用しているのか」に拡大、という「日本語教育の研究主題や問題関心の移り変わり」があるという。(p.12) 私自身の日本語教育観を振り返ると、ちょうどこれと同じ変遷を辿っているように思われる。教壇に立ちはじめた頃は「どうしたら上手に教えられるのか」という教師の技巧、徐々に「どうしたら生徒たちの興味を引き出せるのか」と学ぶ側の心理へ、今は、「日本語を学ぶこと、日本語を教えることが、個々の人生においてどのような意味を持ち得るのか」と関心の中心が移っている。本研究は、Z学校の生徒たち5名の、日本語と出会い、技能実習生となり、帰国して現在に至るまでの「日本語を学ぶ人生」を記述したものである。

インタビューの分析は、桜井(2002)が提唱する「対話的構築主義アプローチ」に従った。手紙、電子メール、日記、自分史(自伝)、等の「個人的記録資料」については、桜井(2005)も「ライフストーリーと補い合って、ゆたかな人間理解に導く可能性をもっているものである」(p.146)としているが、本研究では、生徒が私とやりとりした手紙と電子メール、私が生徒について書いた日記とエッセイも私と生徒たちで構築した「対話的な構築物」(p.39)と捉えて使用した。

やまだ(2000)は、「ストーリーは、語り行為として状況的文脈のなかに埋めこまれているだけではなく、より大きい社会・文化・歴史的な文脈と生態的文脈のなかに埋めこまれているというが(p.24)、本研究は私と生徒たちの極めて個人的な物語でもありながら、日本の少子高齢化と労働力不足、日本と中国の経済格差、中国国内の経済格差、国家の政策、共同体の価値観、言語、といった、社会・文化・歴史的な文脈の「幾重もの入れ子構造」(p.24)の中に埋め込まれている。

第3章 研究方法

2011年から2013年まで私が赴任していた中国のZ学校において私から日本語を学び、技能実習生として1年間日本に滞在後、帰国している生徒たちを対象にライフストーリー研究を行った。

2014年11月28日から12月2日にかけてZ学校のある武漢市を訪れ、生徒5名にインタビューを行った。言語は、中国語でも日本語でもどちらでもよいと断った結果、Aは中国語と日本語、BとEは日本語、CとDは中国語を使用した。中国語のデータは、文字起こしの後、私自身が日本語に翻訳したものを使用した。本稿の最後に、資料として原文のデータを添付した。

他に、電子メール、手紙、私が Z 学校で日本語教師だった当時書いた SNS(mixi)の日記、エッセイをデータとして使用した。

第4章 技能実習生のライフストーリー

A (女/実習時 20 歳) はなかなか面接に合格できず、丸 2 年の準備期間を経てようやく技能実習生として来日することができた。実習先では、先輩実習生の勤務態度の悪さのせいで技能実習生に対する偏見を持っていた上司を、改心させることに成功した。インタビューでは「自分を証明する最善の道は、自分のすべきことをちゃんとすること。」「自分のすべきことをちゃんとすれば、他の人は自ずとあとからあなたを認めてくれます。」という強い信念を語った。技能実習の経験で、自分は目的のために“**坚持下去 (やり通す)**”ことができる人間だという自信を確固としたものにした。

兼ねてから芽生えていた、日本へ留学したいという思いが実習を経て更に強くなった。私のインタビューがその思いを実行に移す決心をさせたという。日本の大学を受験するために日本語学校を通してビザを申請した。(2015 年 6 月来日。2015 年 9 月現在、アルバイトをしながら大学受験の準備をしている。志望校は早稲田である。)

B (女/実習時 18 歳) は Z 学校で生徒会長としてその能力を認められていた。勝ち気な性格で日本語も短期で習得し、渡日の機会を手にした。初めて見る日本で、きれいな空気、整然とした街、まじめで礼儀正しい人々に衝撃を受ける。「なんで日本人はこんないい環境を作ってるの、どうやって作ってるの」「そのとき考えると、やっぱり日本人が自分の生活環境をいいふうに作ってるから、中国人はそういう、ん、思いもなかったから、やっぱり違うな、日本人は偉いです、って思いました。」と語った。中国人として中国をより良くしていかなければいけないという自覚をもって日本で優れていると思われることを積極的に吸収した。

帰国後、アルバイト先で客の日本人の目に留まり、新展開する日本食チェーンの一号店店長に抜擢される。技能実習において日本語と日本式のサービスを学んだことを生かして、日本人の上司と中国人の部下の間を取り仕切っている。B は「日本の進んだ技術を学び自国へ還元する」という技能実習の大義名分そのままの模範的なサクセスストーリーを体現している。

C (女/実習時 18 歳) は丸顔で幼く見え、恥ずかしがり屋で控え目である。しかし実は自立したいという気持ちが強く、中学生のときから親元を離れることに憧れていた。「自分で

独立して生活する」ために河南省の家を出て Z 学校の寮に入った。「他の専門はあまり興味が持てなかったから」「ただ試してみるという態度で」選んだ日本語の専門だったが、2 年生のとき日本人教師が赴任してきて、日本語で話せるようになりたいと思うようになった。本気になると上達が速く、技能実習の面接を受けることを学校から勧められた。小さな憧れが、Z 学校へ、そして日本へ、と少女の世界を広げていった。

D (男/実習時 18 歳) は、Z 学校に来る前に電気の専門学校に行っていた。広州の工場へ実習に行き、こんな仕事を一生するのは嫌だと思った。再起を賭けての Z 学校入学であり、渡日の夢であった。頼りなく見えるが、確固とした意志を内に秘めており、黙々と努力した。いみじくも担任教師がクラスのみなを励ますために言ったように、D は何においても絶対値は決して高くない。しかし向上しつづける力を持っている。

“**改变自己 (自分を変える)**” ということばを渡日前から D はよく口にしていた。日本語を頑張って日本へ行ったら全く違う自分になれると思っていた。しかし、実習中のメールで打ち明けたように、現実はその簡単に変わるものではなかった。日本へ行っても自分は自分だった。実習先の人たちは彼を温かく受け入れてくれたが、彼は日本語に自信がないためにいつも黙っていて、思うように応じることができなかった。技能実習を通して、自分の能力を含めた現実というものを直視した。日々、落胆しながら自分を励まし、内省を深めた。

帰国して、日本がとても温かい場所として心に残っており、今も夢に見る。

Z 学校で後輩たちに日本語を教える仕事に就いた。正式な教師ではないというものの、かねてからの念願であった教師になれた。「僕にとって日本へ行ったのは本当に大きな、人生の大きな転機だった」「今の僕のこんな様子は想像もできなかった」と言う。また、「僕は人を助けたくて、人を助けられるというそういう感覚、学生を教えられる、そして彼らを助けられるという感覚が好きです。」という気持ちも持つようになった。しかし現実は厳しい。学歴のない彼が正式な教師になるためには、専門大学に行かなければいけない。現在、受験準備を進めている。

E (男/実習時 18 歳) は現代の都会っ子にありがちな、生身の人間より家でヴァーチャルな世界に没頭しているほうが好きな少年だった。中学のときいじめられていたというが、Z 学校でもクラスの中で浮いた存在になっていた。ところが、2 年生の冬、技能実習を目指す特訓クラスに参加したのを契機に、日本語を学ぶ仲間としての確かな絆ができた。自信がなさそうなところはなかなか変わらなかったが、面接に何度か臨むうち、堂々とした態度

で受け答えができるようになった。

実習先では、一緒に布団を敷くとき「ひっかけた」という同世代の日本人の友だちがで
き、仕事の後、海辺で話すようになった。お互いに話すうち、彼も「明るくなった感じ」
で、自分も「日本語が上手になった感じ」だった、と語った。「日本語上手になりたいなど
思って、で、話しかけて、仲良くなった」という能動性はもともとの E には見られないも
のであった。「前は 70%自分の世界」だったのが「今は 40%になっちゃった」と言う。他
者を「できるだけ理解し、そしてできるだけ仲良くするように」なった、とも語った。技
能実習を通して、協働の楽しさ、他者と苦楽を共にする喜びを知ったようである。

第5章 結論

1. Z 学校の生徒たちは技能実習を通して何を学んだのか

A は、技能実習に関する一連の経験を通して“要坚持下去 (やり通さなければいけない)”
という信念を固くした。B は、技能実習で、一、我慢、二、気配り、三、サービス、四、日
本語、を学んだ、と語った。C は、中国や中国で育った自分を客観的に見る視点を得たとい
える。D にとって、技能実習は、現実を直視し、落胆しては自分を励ます、内省の日々だ
ったようだが、技能実習を経て自分が大きく成長したと感じているとも語った。内向的だ
った E は、「前は 70%自分の世界」、「今は 40%」と言う。共同生活を送る技能実習を通し
て、他者と関わることに喜びを見出せるようになった。

2. Z 学校の生徒たちは技能実習を通して学んだことを現在どのように生かしているのか

A は改めて日本に留学することを決意し、C と E は日本語を使う仕事に就くことを目指
して日本語の勉強を続けている。D は、帰国後しばらく、Z 学校で技能実習を目指す後輩た
ちに日本語を教える仕事をしていたが、学歴不足で正式な教師にはなれず、進学のための
勉強に取り組んでいる。日本語と日本式のサービスを学んだことを生かして働いている B
以外は、「技能実習生は、修得技能と帰国後の能力発揮により、自身の職業生活の向上や産
業・企業の発展に貢献」(JITCO ホームページ『外国人技能実習制度』の趣旨)という技
能実習の目的が果たせていない。

3. Z 学校の生徒たちにとって日本語を学び技能実習生として日本へ来たことはどのよう な意味を持つのか

生徒たちはそれぞれに仕事の厳しさを学びながらも、日本に好感を持って帰国している。
彼らは中国の激しい社会格差の中で生きていかなければならないが、日本語と日本での経

験が、Z 学校の生徒たちにとって、負の連鎖を断ち切るための武器になり得ると信じて、今後を見守りたい。

4. 本研究の意義

本研究は、5名の技能実習生に焦点を当て、詳細に記述することにより、量的調査では見えにくい生身の人間としての技能実習生の姿を示した。たくましい適応力と洞察力で多くを学んで帰国した技能実習生の姿を見ることができたが、本研究で取り上げた5名がいずれも来日前に日本人と接し徹底した日本語教育を受けていたことが来日後の技能実習を順調なものにしたと考えられる。このことから、来日後はもとより、来日前の日本語教育にも力を入れるべきであることが示せたと思う。

5. 今後の課題

技能実習を円滑で有意義なものとするためには、技能実習生が充実した日本語教育を受けることが重要である。現状では、来日前の日本語教育の質にはばらつきがあり、また、来日後の日本語教育と連携が取れていない。外国人技能実習制度の枠組みの中で来日前の日本語教育が行われるシステムが求められる。

もうひとつの問題は、技能実習生が日本で習得した日本語や専門の技能を帰国後に生かせる場がないことである。本制度を名実ともに開発途上国の経済発展に寄与する国際貢献とするためには、技能実習生が日本で学んだことを自国に還元できる仕組みを整えるべきである。

以上の2点をまとめて、外国人技能実習制度は、日本国内だけではなく、実習生の来日前、滞日中、帰国後、という送出し国と日本の連携を重視して改善していく必要があるということを本研究の提言とした。

参考文献

- 浅野慎一(1997)『日本で学ぶアジア系外国人—研修生・技能実習生・留学生・就学生の生活と文化変容—』大学教育出版
- 浅野慎一(2007)『増補版 日本で学ぶアジア系外国人—研修生・技能実習生・留学生・就学生の生活と文化変容—』大学教育出版
- 伊藤欣士(1994)『技能実習制度』財団法人労務行政研究所
- 恵羅さとみ(2014)「建設分野における外国人技能実習制度の拡大—政策背景、制度、含意」『建設計画』156, 特定非営利活動法人 建設政策研究所
- 太田裕子(2010)『日本語教師の「意味世界」—オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー—』ココ出版
- 落合美佐子(2010)「外国人研修生・技能実習生の生活実態と意識—語りの中から見えてくるもの—」『群馬大学国際教育・研究センター論集』9 (pp.51-68)
- 川上郁雄(2014)「あなたはライフストーリーで何を語るのか—日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシーズ』14 (pp.11-27)くろしお出版
- 小松麻美(2009)「中国人研修生・技能実習生の日本語習得に関する事例研究」『日本教育工学会研究報告集』5 (pp.181-187)
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房
- 田尻英三(2015)「2014年度の日本語教育関係施策」『龍谷大学国際センター研究年報』24 (pp.7-20)
- 田中慎也・木村哲也・宮崎里司(2009)『移民時代の言語教育—言語政策のフロンティア(1)』ココ出版
- 佟岩・浅野慎一(2001a)「縫製業の中国人技能実習生・研修生における日本語習得と社会的諸関係に関する実証的研究(1)」『神戸大学発達科学部研究紀要』8 (2) (pp.183-210)
- 佟岩・浅野慎一(2001b)「縫製業の中国人技能実習生・研修生における日本語習得と社会的諸関係に関する実証的研究(2)」『神戸大学発達科学部研究紀要』9 (1) (pp.167-196)
- 西尾珪子(2009)「研修生・技能実習生と日本語教育」『かけはし(JITCO JOURNAL)』94 (p.22-25) 公益財団法人国際研修協力機構広報室
- 馮偉強(2011)「中国人研修生・技能実習生の日本出稼ぎ移動—人類学的なフィールドワークを踏まえて」『愛知大学国際問題研究所紀要』137 (pp.69-95)

- 馮偉強(2012)「出稼ぎ労働者の中国と日本における社会的ネットワークの形成—中国人研修生・技能実習生の事例にもとづいて—」『日中社会学研究』19 (pp.123-141)
- 馮偉強(2013)「中国人研修生・技能実習生の日本語習得とニッポン」『愛知大学国際問題研究所紀要』142 (pp.153-181)
- 宮崎里司(2013)「グローバルレベルと市民レベルで協同実践する行為主体者（アクター）から捉える新たなアーティキュレーションの提唱」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』5 (pp.29-44)
- 宮崎里司(2015)「ことばの学びの連続性とグローバル化(アーティキュレーション)—日本語教育政策の観点から—」『日本の言語教育を問い直す—8つの議論をめぐって—』(pp.123-132) 三省堂
- 三代純平(2014)「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について」『リテラシーズ』14 (pp.1-10)くろしお出版
- やまだようこ(2000)『人生を物語る』ミネルヴァ書房
- (公社)福岡県人権研究所外国人部会(2014)「外国人技能実習制度について考える—制度改正後の状況と課題—」『リベラシオン』154 (pp.13-118) 公益社団法人福岡県人権研究所
- 入国管理局(2007)『研修生及び技能実習生の入国・在留管理に関する指針』
『2012年度 帰国技能実習生フォローアップ調査報告書』公益財団法人国際研修協力機構
公益財団法人国際研修協力機構ホームページ <http://www.jitco.or.jp/>
厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp/>
入国管理局ホームページ <http://www.immi-moj.go.jp/>
- 「外国人技能実習その意味と課題」『時論公論』NHK (2014年5月7日放送)
<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/187188.html>
- 「シリーズ 人手不足ショック② どう向き合う外国人労働者」『クローズアップ現代』
NHK (2014年6月12日放送)
http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3513_2.html